[報告１]

地域づくりセンターとしての「十和おかみさん市」

高知版の地域づくり支援

淺野尊子（高知県産業振興推進部地域づくり支援課地域支援企画員）

高知県の地域支援企画員制度

私は高知県の四万十町で地域支援企画員の業務に携わっている。地域支援企画員とは、市町村と連携しながら地域の実情や住民のニーズに応じて、地域の活性化に向けた取組みを支援するもので、飲料水など生活用水の確保、あるいは自主防災の組織づくり、商品開発や直販所等への流通販売、廃校を利活用したカフェのオープンなど、さまざまな取組みを支援している。

支援員のほとんどは市町村に常駐し、県の出先機関に属さず、予算や権限をもたないかわりに、職員それぞれの視点で、分野にとらわれず、自由に地域とかかわり、共に育ち合う仕組み。土木の専門職もいれば、保健福祉や林業、行政職など、さまざまな職種が混在し、7 つの地域ブロックごとにチームを組んでいる。

平成 15 年度に創設され、当時たった 7 名でスタートしたが、2 年後の 17 年度には 60 名に増員して現在に至っており、全国に例のない本県独自の制度である。

活動方針は、地域のニーズや思いを汲みながら取組みを具現化するなかで、最終的には自立に繋げることを目指す。スタートして 10 年、県と地域のパイプ役として、より強いコーディネイト機能と戦略的な展開が求められるようになってきた。

地域のニーズや実情を県のあらゆる関係機関に繋げることで、より現場に即した制度設計や施策の展開ができる。また、県や国の情報を必要に応じて地域に提供するとともに、スピード感をもって実現のお手伝いをする。重点的な取り組みとしては、高知県産業振興計画の地域アクションプランの推進や、集落活動センターなどがそれに該当する。生きがいをもってそこで暮らしていくためには、地域づくりの視点プラス地域の産業振興の視点がより強く必要となっている。

集落活動を支える拠点「集落活動センター」

本県は過疎化や高齢化が全国より 10 年先行しており、平成 22 年度の国勢調査では人口減少率と高齢化率がともに全国 3 位と、大変厳しい状況にある。特に中山間地域ではその傾向が顕著なことから、23 年度に中山間地域の 50 世帯未満の集落に、訪問聞き取り調査やアンケート調査を実施し、地域の実態とニーズの把握に努めた。

調査結果からは、人口減少、高齢化の進行による後継者不足、生活への不安、鳥獣害対策・被害など、集落の課題が浮き彫りになる一方で、地域への誇りや愛着、助け合いながら住み続けたいという想いを確認することができた。現在も主要産業は「農業」、農業振興のために必要なのは「担い手・人材確保」と回答されている。

こうした結果をふまえて、平成 24 年度に中山間地域対策課が新たに設置され、組織を拡充、強化するとともに、3 つの取組キーワード「人」、「絆」、「ネットワーク」を掲げ、地域で一定の収入を得ながら安心して暮らしていける仕組み、集落活動を支える拠点として、「集落活動センター」制度を創設し、私たち地域支援企画員も深く関わっている。

集落活動センターは、?集落の維持再生と、?将来の担い手となる人材の確保、育成を目的に、地域住

民が主体となって旧の小学校や集会所等を拠点に、地域内外の人材を活用しながら、近隣集落と連携を図り、生活、福祉、産業、防災などについて、地域の実情に応じて総合的に地域ぐるみで取り組んでいく仕組みだ。

センターの特徴として、活動内容を画一化していないことが挙げられる。活動内容は、共同作業や伝統行事等の集落活動のサポートや福祉や生活支援からエネルギー資源の活用、その他の活動まで、盛りだくさんのメニューになっているが、センターの機能は地域の実情によって異なるため、メニューの指定はせず、地域からの提案によるオーダーメイドによることとしている。

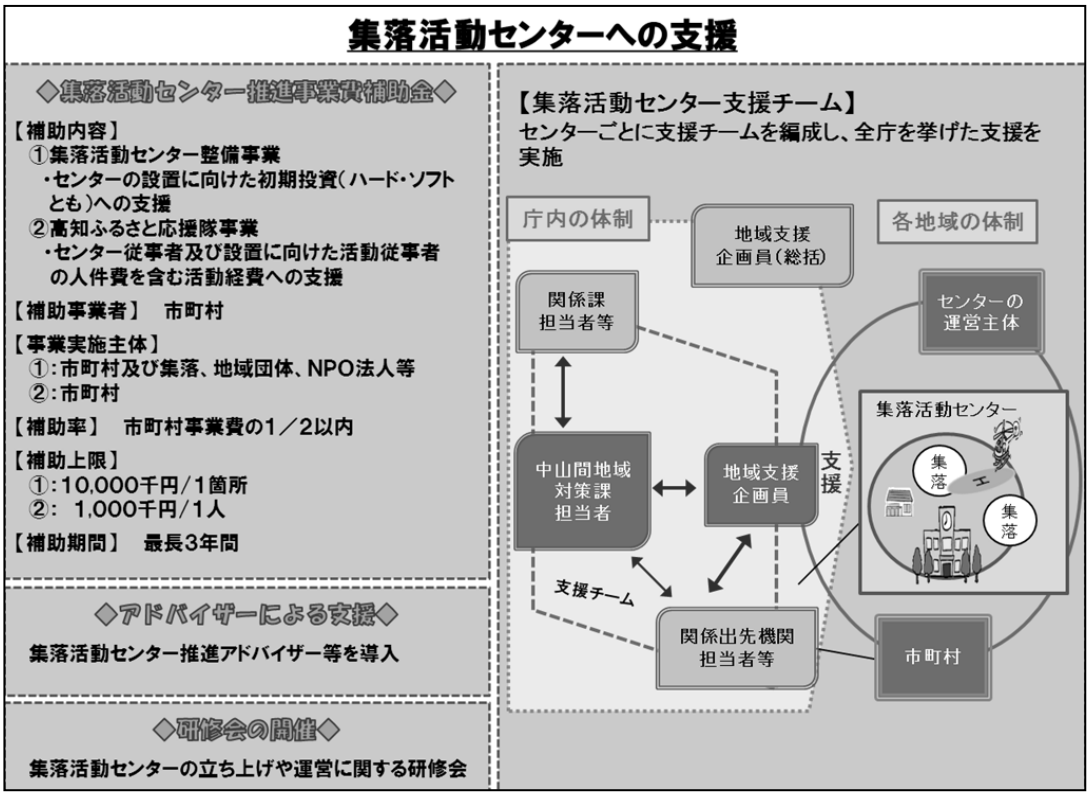
もうひとつの特徴として、農産物の生産販売や特産品づくりなど、地域経済を生みだす、人とモノの流れを生む活動を盛り込んでいる。生きがいを持って暮らしていく、集落を維持していく、次の世代に繋げていくためには、生活面のサポートだけではなく、経済を生みだす仕組みがセットで必要だ。そのキーになるのが農業。

下図は補助制度の概要と、県をあげての支援チームの体制だ。取り組みたい個所ごとに農・林・水産業部門、中山間地域対策や地域づくり部門、保健福祉部門、観光部門など、全庁あげて支援体制を組み、総合的にことにあたるようになっている。

「高知ふるさと応援隊」の導入

せっかくの制度も、それを動かす人がいなければ、ただの入れものになってしまう。本県は高齢化が進行しているが、経験を積んだ熟練者が多いともいえる。地域の高齢の方が、消費者が喜ぶ手づくりならではのいい味を出したり、地域の活動グループのなかでもメンバーの心の支えになっていたりする。引き続き元気で生き生きと働いていただきたいと思っている。

高齢の方は、かなりの技を持った貴重な資源ともいえる。ただ、そうはいっても集落活動や産業の担い手不足が深刻化しており、68.9%の集落が「移住者を受け入れたい」と回答するなど、地域外からの人材の受入も必要になっていることも確かだ。そのため、新たな視点で、地域の皆さんとともに集落活動センターを拠点とした仕組みづくりを始め、地域活動を推進する「高知ふるさと応援隊」の導入を支



図：集落活動センターへの支援

援している。

総務省の「地域おこし協力隊」という特別交付税措置の仕組みは、都市圏から地域に人の流れをつくるものだが、県内の人材も活用できるようにしたのが「高知ふるさと応援隊」だ。

現在、地域おこし協力隊やふるさと応援隊は、高知県下で約 60 名弱。土佐の赤牛の商品開発、マコモダケの栽培、山の間伐など、さまざまな活動に取り組んでいる。経歴も、大学院を卒業した人から情報システム関連に携わっていた人など千差万別で、それぞれに強みを持っている。

まずは人を知る、地域に慣れることから始まり、徐々に信頼関係を構築していくことになるが、当然、取組過程のなかで軋轢が生じてくる場合もある。いずれにしても、協力隊と地域が共同作業に携わるなかで、信頼関係を築いていくまで、行政、特に市町村役場と我々地域支援企画員は、双方のコーディネイト役としてきめ細かなフォローが求められている。

集落活動センターは、全国的にも画期的な取り組みとの評価をいただいているが、それぞれの取組みは、これまでの延長線上にあるもので、抜本的な新政策、特効薬ではなく、ひとつの手段だ。

1 年弱が経過するなか、県下で 6 つの集落活動センターが立ちあがりつつあるが、制度もセンターもまだまだ発展途上の段階で、試行錯誤を繰り返しながら、地域の特性に応じて日々取組みを重ね、改善していく必要がある。

明治大学の小田切先生から本県に、次のようなメッセージをいただいている。

「地域住民と市町村担当者、地域サポート人が「集落活動センター」という名前に思考停止せずに、地域戦略を考え抜くこと。そして、それを県を含めて全員で情報共有すること」です。

集落活動センターの先駆「十和おかみさん市」

集落活動センターの制度が先進的な取組として評価いただいているとお話ししたが、実は、十和おかみさん市は、とっくの昔にそれ以上のことに取り組み、中山間地域での生きがいづくり、あるいは担い手を育て、地域経済を生みだしてきた。

アグリネット理事長（JA-IT 研究会副代表委員）の黒澤賢治氏には高知県にお越しいただき、「地域資源を生かした地域最適」というテーマで、十和のおかみさん市の役員にアドバイスをいただいた。その際、商品開発委員会などの仕組みを構築する、あるいは売れ筋情報や旬の商品、定番商品を踏まえた周年計画、年間の生産栽培計画を作成する、地域資源を活用した加工品開発は単品対応ではなく、おかみさん市のおもてなしと四万十川の清流保全等々の取組を併せたオリジナルブランドとしてシリーズ化していく等、様々なご提案をいただいた。

四万十川中流域に存在する四万十町十和は、森林面積が 90％を超える山村で、椎茸やお茶、栗、ユズ、水稲など、農林産物の複合経営が多い地域だ。昭和 40 年代後半から、集落単位で設立された女性グループが、味噌づくりや漬物などの加工、手づくりの直売所で野菜販売等を行い、楽しく長続きできるものにしたい、安定的な収入を得られるようにしたい、直販の経験を活かしたい、自分たちの住む十和村をもっと元気にしたい、ということで、2001 年におかみさん市が発足した。

6 次産業化、あるいは農商工連携という言葉が一般に認知される以前から、同様に取り組み、おもてなしによる観光交流、ISO14001 の取得などに見られる地域資源の保全活動など、さまざまな活動展開をしながら、2011 年度に株式会社化して、現在に至っている。

（株）十和おかみさん市

十和おかみさん市代表取締役　居長原信子

株式会社十和おかみさん市は、実態はおばちゃんの集まり。小さな地域のおばちゃんの集まりの話として聞いてください。

おかみさん市は、旧十和村、今は合併して四万十町にある。愛媛県に近い県境で、昔は陸の孤島と言われたほど山深いところだ。

おかみさん市は基本的にグループ単位で活動している。会員は女性 107 人、男性 10 人、計 117 人。他に休んでいる方が 20 名ほどいる。一応株式会社なので株主総会と毎月の役員会があり、代表者会も月に 1 度、必ず開催している。これはグループの代表者が集まって情報伝達や取りきめを行なう会。エコ部会（ISO に取り組む）、加工部会、給食部会、イベント部会で活動している。

四国一の自然林と清流四万十川沿いの山里

十和地区にある 19 集落のうちの 18 集落におかみさん市のグループがある。役場の所在地から一番遠いところは 20km 近くあるが、代表者会議には必ず代表者が出て来るし、出荷物も持って来る。

92%が山だが、特徴的なのは人工林率が非常に低く自然林が多いこと。昔はシイタケ栽培が有名で、一農協として全国一を誇ったこともある。炭焼きが盛んだったことも、雑木林が残っている条件になっていると思う。

その山の合間を縫うようにして少しの耕作地があるが、系統出荷されるのはシシトウ。シシトウは狭いところでも収益があがる。それから、冬場のナバナ。いま十和へ来ると、一面の緑の絨毯になっている。水田の裏作で、殆どの農家がナバナを栽培しており、3 月中旬過ぎになると菜の花だらけになる。

また、四万十川沿いは非常に良質のお茶がとれ、独自に、自分たちで工夫をしながら売りに出している。

十和おかみさん市の年間を通した 5 つの取組み

おかみさん市では年間通して、①野菜の直販　②おもてなしの取組み　③加工品開発・販売　④学校給食　⑤ISO14001 の実践、に取り組んでいる。

① 直販、イベント販売：高知市内のスーパーの店内とアンテナショップを利用して、野菜の直販とイベント販売を実施している。

② おもてなしの取組み：

都市部との体験型交流で十和のファンづくり

都会の方を十和へ呼んでいろいろな体験をしながら郷土料理を食べてもらうという取組みを、年に 4 回ほど、10 年近く続けている。グループごとに担当し、協力しながらおもてなしをする。

こいのぼりの川渡しを全国で一番最初にやったのが私たちだ。もう 45 年ほどになるが、5 月の連休を中心に 1 ヵ月くらいはこいのぼりがかかる。あげるのを手伝ってもらう体験もある。

夏場の川遊びや稲刈りもある。稲は手で刈って稲架にかけ、ハーベスタで脱穀する。栗拾い、冬のシイタケ狩り、お花づくり、はし削りなど、ありとあらゆる体験をして十和を知っていただく、十和のファンをつくるということでやっている。

料理は高知独特の大皿に盛る皿鉢（さわち）料理だ。

知名度のなかった十和が、この活動によってファンができた。リピーターが多く、300 名近い会員がいる。この間も「春のイベントはいつありますか」と電話がかかってきた。都市との交流は非常に大事だと感じている。

道の駅で郷土料理のバイキング

H19 年に道の駅『四万十とおわ』がオープンしたが、元々1 日の車の通過台数が 1,000 台しかなか

ったところ。10 人中 8 人は「あんなところに道の駅をつくっても人は来ない」と言っていたが、おかげさまでたくさんの人に来ていただいている。その道の駅を借りて、おかみさん市が週に一度、おもてなしバイキングを実施している。本当に家の夕ご飯に出すような郷土料理で、自分たちがつくった野菜を使うことが基本だ。今年で 6 年になるが、一度も休まず続けている。

最初、隣近所のおじさんたちからは、料理を見て「なんだ、昨夜のおかずじゃないか」「これで 1,000 円も取るのか」などと言われたりもしたが、そういう人たちも、今は、都会からお客さんや子どもたちが来ると必ず郷土料理を食べに連れて来てくれる。わざわざ高知から 2 時間かけて来てくれるお客さんや、毎週来てくれるお客さんもいる。友達感覚でお話ができるようになっていて、その方がまた友達を連れてきたりと、どんどん輪が広がっている。

以前は 12 月後半から 1 月は閑古鳥が鳴き、30～40 人来ればいいという状況だったが、最近は常に 100 人ほど来てくれる。1 日の車の通過台数が 1,000 台足らずの場所でそれだけの人が来てくれることは、我ながら本当にすごいと思っているし、最近はこういう料理を食べたいという人が増えているのかなと感じている。

このバイキングも他の活動と同じように各グループが交代で担当するので、メニューも味も違っていて、毎週来てくれるお客さんたちも「また違うものが出てるね」と楽しんでくれており、それがいいのかなと思っている。

うちの取組みは野菜の直販が中心だが、その野菜を使った活動もとても大事だ。最近の若い人たちは昔ながらの料理をつくらなくなった。核家族でおじいちゃんおばあちゃんと同居していない子どもたちは、昔のものを食べられなくなった。そういう意味で、郷土料理の伝承に一役かっていると思っている。

十和おかみさん市による農産物集荷

社員は 2 名。1 人は男性で、週に 2 回、遠方や高齢で運転できない人の所への集荷を担当している。野菜づくりも荷造りもできるけれども「出荷ができない」という高齢の方も多いので、これからは集荷が大事になってくると考えている。

私たちの活動は、売上はたいしたことはない。金額としては微々たるものだが、お金に代えられないものがたくさんある。おかみさん市があることによって地域が一つになれたと感じている。

① 加工品開発、販売：一応、加工品の開発などもしているが、とても難しい。これといったものができていないのが現状だが、頑張ってはいる。

② 学校給食の取り組み：食材の提供は始めてから 1 日も休まず続け、子どもたちとの交流も行なっている。

③ ISO4001 の実践：環境に優しい農業の推進、実践はセールスポイント。エコ表示シールに、農薬をかけたかかけないか、化学肥料を使ったか使っていないか等を明記するように心がけている。

売上は本当に微々たるものだが、おばちゃんたちが頑張っているというところを評価していただきたいと思う。